

第 23 回豊橋市小中高特連携教育推進協議会議事要録

平成 31 年 2 月 27 日 開 催

豊 橋 市 教 育 委 員 会

## 第 23 回 豊橋市小中高特連携教育推進協議会

日時	平成 31 年 2 月 27 日（水）午後 3 時 00 分～午後 4 時 45 分
場所	豊橋市役所 講堂
構成員	山西正泰 教育長                      渡辺嘉郎 教育委員(会長)   高橋豊彦 教育委員 内浦有美 教育委員                      中島美奈子 教育委員              川村昌宏 時習館高校長 藤原照明 豊橋東高校長                  平松直哉 豊丘高校長              浅野禎久 豊橋南高教頭 西牟田哲哉 豊橋西高校長              加藤一史 豊橋工業高校長          白井由美子 豊橋商業高校長 丸崎恵子 豊橋高校長                      加藤勝啓 豊橋聾学校教頭 白濱菜穂子 豊橋特別支援学校校長      山川恭子 くすのき特別支援学校校長 水野純夫 松山小学校長                  伊丹和彦 八町小学校長              兼子知子 大崎小学校長 宮濱正道 南部中学校長                  佐藤充宏 豊岡中学校長 古池弘人 教育部長                      駒木正清 教育監
ワザバ-	加藤英雄 東三河教育事務所主査                  仲田昌弘 豊川市教育委員会指導係長 峠尚良 田原市教育委員会課長補佐              山本重美子 蒲郡市教育委員会課長補佐 神谷勝則 新城市教育委員会指導主事
事務局	角野洋子 教育政策課長   木下智弘 学校教育課長 他 (全 6 名)

### 議 事 日 程

- 1 平成 30 年度各分科会の活動状況・成果及び次年度の活動について
  - (1) 英語教育分科会
  - (2) 理科学教育分科会
  - (3) 特別支援教育分科会
  
- 2 新分科会設置について
  
- 3 東三河小中高特連携教育の推進について

(渡辺会長)

ただ今から、「第23回豊橋市小中高特連携教育推進協議会」を開催いたします。

はじめに、公務の都合で欠席をされる委員の代わりに、ご出席をいただいた方のご紹介をさせていただきます。豊橋南高等学校長木下委員の代理として同校教頭浅野先生、豊橋聾学校長鈴木委員の代理として同校教頭加藤先生です。よろしくお願いいたします。

さて、本会は平成20年度末に発足しました。平成25年度からは、東三河他都市の教育委員会や教育事務所の方々にもオブザーバーとして声かけをさせていただいております。本日は、東三河教育事務所、豊川市教育委員会、田原市教育委員会、蒲郡市教育委員会、新城市教育委員会の先生方にご出席をいただいております。本会の後半で、ご意見をいただきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、次第に従って進めてまいりたいと思っております。議題の(1)平成30年度各分科会の活動状況・成果及び次年度の活動についてです。この議題については、別冊の報告書に沿って進めさせていただきます。なお、この報告書は、市内全小中学校、市内の高等学校及び特別支援学校、東三河の市町村教育委員会、分科会委員のみなさんにも後日送付させていただきますので、ご承知おきください。それでは、今年度の活動状況・次年度の活動について、ご報告をいただきます。概ねの時間といたしまして、1分科会あたり10分程度で、その中で質疑応答もできればと考えております。はじめに、英語教育について、英語教育分科会委員長の豊岡中学校長佐藤充宏先生から、報告をしていただきます。

(豊岡中学校 佐藤校長)

分科会を6回開催しました。主な活動内容としては、異校種の授業を見合い、研修会も含めた授業研究を推進することを柱として今年度進めてきました。また、情報交換として、英語部報の発行であったり、小学校からの情報である「パワーアップ with イングリッシュ」を発行したりして、お互いの情報を共有しています。先生や生徒の動きを活発にしようということで、豊橋東高等学校の生徒・先生・ALTの方が、中学校の英語活動に参加したり、豊橋市のALTの方が、アメリカのトリードに行く高校生のための事前研修会に参加したりして、それぞれの理解を深め、協力していこうという活動を行っています。アンケートの分析においては、「英会話の授業が楽しい」「もっと英語が使えるようになりたい」に関しては、肯定的に捉えている生徒が多いです。肯定的な生徒が80%を超えているため、「主体的・対話的で深い学び」につなげていくような視点で更に改善していくことと、「CAN-DO リスト」を整備して、更に使えるようにしていきたいと考えています。中学校については、「小学校の英会話の授業が役にたっているか」については、「かなり役立っている」と肯定的に捉えておりまして、小中学校、更に高等学校の生徒や教員についてもデータ分析を行う必要があるということで、今年度実施をしました。分析については、来年度に小中高の分析を実施します。来年度の課題としましては、小中高等学校、更に特別支援学校及び特別支援教室を含めてうまく連携がとれればと考えています。「CAN-DO リスト」の整備、更に意識調査をして効果的なものを展開していきたいと考えています。

(渡辺会長)

ありがとうございました。ただ今の報告について、ご意見・ご質問はございませんか。

(渡辺会長)

子どもたちが楽しいというのは大いに良いことです。楽しいと感じている子どもたちは、90%近くいるわけですが、楽しくないという子どもたちについての何か分析はあるのでしょうか。

(豊岡中学校 佐藤校長)

基本的に、英語に対して楽しくないと感じている子どもは、「英語がうまく話せない」「英語がうまく聞き取れない」ということが根底にあるため、苦手意識をもっている子どもに対してのきめ細やかな活動ができればと考えています。小学校の英会話活動の入口をゲーム的なもの、歌的なもので楽しくということはあるわけですが、英語力を伸ばすということに焦点をあてて、英語の力を伸ばしながら楽しいということにつながられるような形がとればと、英語教員が切磋琢磨しながらお互いの技量を高めていこうと考えています。

(渡辺会長)

八町小学校で、イマージョン教育が展開されることになるかと思いますが、それに関して何かありますか。

(八町小学校 伊丹校長)

八町小学校では、「英語で学ぶ」ということで、英語以外の教科において、英語を使って授業をするという研究を行っています。例えば、体育、音楽、図工、算数などで行っています。先日、1年生の算数でも行いましたが、低学年ほど抵抗なく話すなど意欲的だと感じました。一方で、話し合いや振り返りは英語で行うことがなかなか難しいと感じています。また、社会科は英語で行うのは難しいと感じています。来年度より、イマージョンコースを新設するというので、豊橋市の決定ですので、学校としても責任と共に不安を感じています。これについては、豊橋市の施策として、市教委も全面的に協力してくれるということで少し安心しているところではありますが、今後に向けてクリアーしていかななくてはいけないことがたくさんあると感じています。

(渡辺会長)

小学校において英語で授業することで、中学校、高等学校へとつながっていくといいと思います。

(高橋教育委員)

「もっと英語を使えるようになりたい」について、小3から中3に向けて下がっているということが気になります。使えるようになりたいというのは、好奇心の話になりますが、これが下がっているということと、「もっと外国を知り、外国にも行ってみたい」について、中1が低く、中3で上がっていることについて、質問項目によって相関がずれていることも気になり、どういう意識なのかと疑問を感じたので教えていただければと思います。

(豊岡中学校 佐藤校長)

なかなか難しい質問だと感じっていますが、課題は一つと考えています。学年が上がってい

くごとに興味を伸ばして「外国へ行きたい」「もっと学びたい」という意識になるようにやっていきたいと考えています。

(渡辺会長)

今後、英語の授業はすべて英語で行っていくことになっていくのですか。

(豊岡中学校 佐藤校長)

流れとしてはそうなると思います。高等学校だけでなく中学校でも意識して行っています。小学校も含めて、英語を主にして英語の力を伸ばしていきたいと英語教員は考えています。小学校においても、そういった流れが伸びていけばと考えています。

(渡辺会長)

中学校の英語授業が英語で行うことになるため、小学校から慣れていくという形で進めていくということですね。

(豊橋東高等学校 藤原校長)

この調査の数字は追跡調査のものではなく、各学年に対する数字ですか。

(豊岡中学校 佐藤校長)

その通りです。

(豊橋東高等学校 藤原校長)

ということは、グラフにすると大きな差のように感じてしまいますが、いずれも高い数字だと感じます。これが追跡調査として小3から中3まで行われていて変動があるならばおかしい数字だと思いますが、問題ないかと思います。

(渡辺会長)

次に、理科学教育について、理科学教育分科会委員長 時習館高等学校長 川村昌宏先生から、報告をしていただきます。

(時習館高等学校 川村校長)

小中学校の教員が授業で生かすことができるように、高等学校の専門的知識や実験器具の使い方を学ぶ機会や、校種を超えた多様な先生方との意見交換ができる機会を大切にして実施しました。活動状況については報告書にあるとおりですが、成果につきましては、時習館高等学校を会場に、時習館高等学校・豊丘高等学校・豊橋工業高等学校の先生方が、小学校の先生に理科実験講習会を実施し、参加者については、昨年度の26名から37名と増加し、市外からも4名の参加者がありました。また、豊橋工業高等学校の授業を参観してもらいました。豊橋工業高等学校は2年連続になりますので、来年度は豊橋西高等学校での実施を予定しております。豊橋工業高等学校の授業参観については、教員の多くは普通科高校を卒業しているかと思うので、専門学科の授業を参観することは、先生方にとってよい経験になったと思います。小中学校理科研究部の授業研究会においては、本分科会の委員でもある

豊橋工業高等学校の柘植先生が、教材・教具の開発に深く関わることができました。14ページにつきましては、今年度の活動方針を決める会の内容です。15ページにつきましては、夏休みに入ってすぐの7月24日に行った小学校の先生方向けの理科実験講習会の様子です。化学分野は「気体の発生」、地学分野は「共振」、物理分野は「音について」、生物分野は「人の目と脳の関係」について行いました。16ページからは、理科実験講習会のアンケート結果です。自由記述の欄に記入された内容において、小学校教員からの質問や疑問を事前または当日に受け付けて回答をしてくれるとありがたいということのため、来年度は改善していきたいと考えています。また、「田原市では、この夏に渥美農業高等学校で小中理科教員が30名程度集まって研修することになりました」とありますが、豊橋市は初任研を豊橋工業高等学校で行ったり、本分科会で交流を行ったりできています。18ページは、豊橋工業高等学校での授業見学会の様子です。情報交換会では、「中学校の授業の教材開発に協力してもらえばよかった」という意見がありましたが、工業高等学校なので様々な器具や材料がありますので、豊橋工業高等学校の教頭先生が窓口となって協力していく体制をつくってくださることになりました。20ページは、岩田小学校で行った小学校理科授業研究会の様子です。「てこ」についての授業でしたが、先程報告させていただきましたが、豊橋工業高等学校の柘植先生が、小学校理科研究部と鈴木先生の依頼を受けて、子どもたちが体感しながら「てこ」の学習ができるような教材教具の開発に協力しました。実際には、「腕相撲実験器」を柘植先生が作成し、それを使って授業が展開されました。高等学校としても大変ありがたい協力をさせていただきました。21ページについては、東部中学校で行われた中学校理科研究授業研究会の様子です。ブレーカーを教材とした電気の授業でしたが、豊橋工業高等学校の柘植先生が相談を受けて、ブレーカーの規格などについてアドバイスを行いました。22ページは、今年度のまとめを時習館高等学校で行いました。来年度の理科実験講習会については、開始時間を少し遅めにし、参加しやすいようにしていきたいと思えます。また、参加申込書に質問欄を設けていきます。高等学校の授業研究会については、豊橋西高等学校で実施していきます。

(渡辺会長)

ありがとうございました。ただ今の報告について、ご意見・ご質問はございませんか。

(渡辺会長)

16ページのアンケートの報告で、理科が専門でない教員が17人で初めて参加した教員が19人ということで、多くの先生方が参加してくれたことはよかったと思えます。気になったことは、理科の実験は準備が大変かと思えますが、実際は実験するよりも準備の方が時間がかかり先生方も大変かと思えますが、小中学校の先生方は一人で準備もできているのだろうかという疑問を感じました。高等学校については、18ページに「10人の生徒に対し、2名の教員で授業ができており手厚い指導ができていた」とありますが、小中学校では難しいと思えますがどうでしょうか。

(豊橋工業高等学校 加藤校長)

豊橋工業高等学校では、10名をグループとして1名もしくは2名の教員で指導を行っています。理由としては、専門的な機械等を使うため、安全を第一に考えてのことです。特に

安全配慮が必要な場面では2名の教員を配置して手厚く指導しています。そういう教育環境をつくっていただいております、ありがたく感じています。

(時習館高等学校 川村校長)

普通科高等学校としても、うらやましいと思っています。特に、豊橋工業高等学校では、課題研究という3年生がそれぞれのテーマをもって一年間をかけて成果物を作っていくという授業もあり、旋盤を使う場面などがあるため安全配慮がされている状況だと思います。普通科高等学校としてもいいなあと感じています。

(渡辺会長)

小中学校も同じように実験助手のような方がいないため、助け合いができるような体制ができないかと思っています。

(八町小学校 伊丹校長)

小学校で実験準備の時間がかかるということと、小学校では学級担任が授業をするため、実験準備をしても1回しか使えないということがあります。中学校では、1度準備すれば数回使うことができるので準備のやりがいがありますが、小学校では、時間がなく厳しい状況のため実験が軽視されがちになっています。しかし、授業が第一であるため、多忙化解消や部活動改革によってつくられた時間を使って、実験準備を各学校で取り組んでいきたいと思っています。理科は、実験準備が大変ですが、準備をすることで子どもたちが一生懸命学習に取り組み、よい体験ができるのでしっかり取り組んでいきたいと思っています。

(渡辺会長)

人的支援を増やすことが大変難しいことは、教育委員をやって感じていますし先生方も身に染みて感じていることかと思いますが、人手をまわしていくことも考えてほしいと感じました。

(渡辺会長)

続いて、特別支援教育の活動状況等について、特別支援教育分科会委員長くすのき特別支援学校長の山川恭子先生から、報告をしていただきます。

(くすのき特別支援学校 山川校長)

特別支援教育分科会ですが、小学校入学以前の幼稚園・保育園の先生方にも入っていただき、特別な支援を必要とする子どもたちに対して、幼稚園・保育園から高等学校を卒業するまでのつながりを意識して分科会を行ってきました。実際には、「個別の教育支援計画」の作成・活用・引き継ぎについて検討してきました。活動状況につきましては、豊橋市小中学校特別支援研究部会の授業研究会に2回参加したことも含めて合計6回行いました。成果については、教職員用の「個別の教育支援計画の活用と引き継ぎの手引き」を平成28年度に作成しておりますが、この手引きを更に活用してもらうことが「個別の教育支援計画」の作成・活用につながっていくということで、どのように伝えていくのかについて話し合いが行われました。特に、経験の浅い教員や初めて特別支援学級を担当する教員に知っていただくため

には、この手引きの存在やどのように活用していくかを知ってもらうことが大切ではないかということが話題になりました。そこで、様々な研修会において手引きを持参していただき、手引きの内容や使用方法等について説明をさせていただくと共に、PRをさせていただきました。次に、放課後等デイサービス事業所との関係について、文科省においても、学校・地域・保護者が連携をとって行っていくことを言っているため、そのことも含めて手引きの改正も行ってきました。中学校から高等学校等への「個別の教育支援計画」の引き継ぎについては、昨年度から話し合いを行ってきました。引き継ぎの方法や文書の内容等について、分科会で検討し、その後、中学校及び高等学校等に対して説明をさせていただき、引き継ぎについての文書を発出させていただきました。今年度初めて、中学校から高等学校等へ「個別の教育支援計画」の引き継ぎが学校から学校へと直接行われることとなります。ただし、今年度については、特別支援学級・通級の子どもを対象に実施しますが、今後は通常学級の特別な支援が必要な子どもも対象として広げていきます。方策等については今後の課題にしたいと考えています。このことについては、この地域での初めての取り組みになると思います。今後、様々な地域にモデルケースとして広がっていくとよいと考えます。次に、「個別の教育支援計画」の保護者理解を得るための方策についてです。一番の課題は、通常学級の特別な支援が必要な子どもの支援のため、保護者にどう理解してもらうのかということです。保護者の方が、「うちの子は特別な支援は必要ありません」と言ってしまえば終わってしまうので、以前豊橋市で作成したリーフレットを見直して、みなさんのお手元にあるように「個別の教育支援計画でのびのびと」のリーフレットを新たに作成しました。このリーフレットの使い方についても、必要な時に配付していく方法、PTA総会などで全保護者に配付する方法など、使い方についても今後検討していき、このリーフレットを有効に活用して保護者の理解を得たいと考えています。このリーフレットについては、今後各小中学校にも配付していきますので、ご活用いただけるとありがたいです。次に、「個別の教育支援計画」の作成・活用・引き継ぎのアンケートの結果についてです。結果については、26ページ以降に掲載しています。その中で、一番の課題と感じているのが、幼稚園・保育園から小学校への引き継ぎが十分にされていないということです。また、幼稚園・保育園の作成率につきましてもあまり上がっていない状況もわかりました。次年度については、保育課の方も特別支援教育分科会に参加していただき、幼稚園・保育園からつながっていくようにしていきたいと思います。今まで話してきたことが、次年度への課題・今後の方向性につながっています。「個別の教育支援計画」の作成・活用については、作成するだけでなく活用してもらえるように、どのように広めていくかについて検討を進めていきたいと思います。情報の引き継ぎにつきましても、幼稚園・保育園から小学校への引き継ぎの部分をしっかりやっけていけるように考えていきたいと思います。また、今後につきましては、保育課に入っいただくことで、更に支援をつなげるための交流・連携の強化を図っていききたいと思います。この分科会で特別支援教育について話し合ったことを全体に伝えていくことがなかなかないため、伝達していくことについても考えていきたいと思います。

(渡辺会長)

ありがとうございました。ただ今の報告について、ご意見・ご質問はございませんか。



(渡辺会長)

アンケート結果をみると、あまりうまく引き継ぎができていないのが現状だと考えてよろしいでしょうか。

(くすのき特別支援学校 山川校長)

どのように引き継ぐかということであって、全く引き継ぎがされていないというわけではないと思います。幼稚園・保育園から小学校に、口頭もしくは指導要録などで引き継ぎはされています。しかし、「個別の教育支援計画」の作成自体が、幼稚園・保育園ではなかなか進んでいない所もあるようですので、この部分を今後進めていきたいと思います。小学校から中学校についてはかなり進んでいると思います。中学校から高等学校等については、今後更に進んでいくように考えていきたいと思います。

(豊橋南高等学校 浅野教頭)

今年度、1年生の保護者からの要望で「個別の教育支援計画」の引き継ぎがありました。指導について、保護者の方と中学校で少しずれ違いがあったようで、中学校に確認をさせていただいて、必要な部分だけ引き継がせていただきました。その生徒については、中学校の指導を確認させていただいて、高等学校においての対応を決めて共通理解のもと指導を行っています。それ以外にも、保護者から発達障害の診断がでたので対応をお願いしますという依頼がありました。そのため、この生徒については「個別の教育支援計画」をつくっていく予定です。

(中島教育委員)

くすのき特別支援学校の見学をさせていただいて、大変充実していることと、子どもたちに関わる先生方の指導がとても的確で愛情に満ちた言葉がけもできており、優れた先生方だと感じました。支援教育に携わる教員は優れた教員でなくてはいけないと思います。リーフレットについては、すべての保護者に渡すタイミングがあるとよいと思いました。発達障害などは、他人ごとではなく、誰にでも起こりうることを考えれば、地域の教育力つまり保護者同士が支え合って子どもを教育していくことが学校教育の根底にあるべきだと思います。保護者の無知によって、子どもを追いつめてしまう部分があったり、自分の子どもの状況を認めなかったりということがあります。発達障害など支援が必要な子どもについては、3歳3か月健診の後は、就学時まで健診がないため、その間に、幼稚園・保育園・こども園で気になってもなかなか動かない、動けないということがあり、これは保護者のせいではなく、保護者の繊細な思いは自然なことであると思います。発達障害などは、誰にでも起こる可能性があり、特別なことではないということを周知していくことは進めていただきたいと思います。

(高橋教育委員)

「個別の教育支援計画」について、市内では様式がどのくらい統一されているかという現状を教えてください。

(くすのき特別支援学校 山川校長)

9割以上が指定された様式で作成しています。先日行われた教育支援委員会でも、様式についてはまだ意見もあるようですので、様々なところと連携して検討していきたいと思えます。付け足しですが、全体に周知ということで、二川南小学校では、全体場で「支援マップ」を配付して説明しているという話がありました。こういったよい事例について、全体に周知するまでには至っていないので、周知についても考えていきたいと思えます。

(渡辺会長)

続いて、議題(2)の新分科会設置について、教育政策課角野課長よりお願いします。

(角野教育政策課長)

前回の協議会で、山西教育長から時代に即した新しい分科会をつくってはどうかという提案があり、前回の協議会の中でも、「言語能力」が今後重要になるのではないかとすることを様々な委員よりいただきました。そこで、「言語能力分科会」の設置についての提案です。設置の背景としましては、文科省の資料にあるように数学的リテラシー、科学的リテラシーに比べて、読解力が全国的に低いというデータがでています。全国学力・学習状況調査においては、小中学校共に、全国・県に比べて豊橋市の国語の学習状況はポイントが低く、平日の読書量についても低いという結果がでています。言語能力の確実な育成については、小中高等学校共に、「新学習指導要領の改訂のポイント」として明記もされています。そのような状況をふまえて「言語能力分科会」を立ち上げることで、全ての学習の基盤である言語能力の向上を図り、主に「国語」「総合的な学習及び探究の時間」を軸に、それぞれの発達段階における言語能力の育成の課題や方策を明確にしながら小中高等学校の連携を図っていきたくと思えます。課題は大きく3点程考えています。1つ目は、小中高等学校の指導のつながり。2つ目は、それぞれの発達段階において授業でどのように言語活動を位置付けていくか。3つ目は、読書量が減少していること。そのような課題をふまえて方策としては、教員へのアンケート調査を実施し、授業づくりについて分析していく。小中高等学校の授業研究会に参加していく。国が実施している研修会に参加して知見を広めていく。読書離れに対する方策を検討していくという方策を考えています。平成31年度の活動計画としましては、まずアンケートから実施していきたいと考えています。メンバー構成としては、国語の先生を中心に構成していきたいと考えています。

(渡辺会長)

ありがとうございました。ただ今の説明について、ご意見・ご質問はございませんか。

(渡辺会長)

子どもたちは本を読まなくなってきましたし、人と人が対面して話をするよりモニターを見ている時間の方が多くなっているかと思えます。今後、こういう状況が増えていくかと思えますし、人間と人間が関わるとストレスも発生しますので、AIやモニターと関わっている方が楽だと感じる子どもも増えるかと思えます。子どもたちは、楽な方に流れていく傾向があるので、言語能力が低下しないようにこの分科会を立ち上げていくことかと思えますがいかかでしょうか。

(豊丘高等学校 平松校長)

提案を聞いて感じたのが、子どもたちの生活体験が少ないということです。そのため、言葉に対する実体験が減ってきているのではないかと思います。生活体験の中から実感して言葉が使われたり、体験に基づいた言葉の使い方をしたりするというのが基盤にあるかと思えます。体育の授業においても言語活動を入れていこうということで、子どもたちは話し合いながら授業を行っています。国語を中心に始めていくということですが、基盤となる体験活動を何とか組み込めたらと考えます。

(南部中学校 宮崎校長)

立ち上げについてはよいと思いますが、言語能力という定義をはっきりしていかないと分科会の方々がやりにくいかと思います。学習指導要領では、それぞれの教科において「ものの見方・考え方」があり、それぞれの教科の言語活動は共通している部分もあれば、教科による特性もあります。先程、国語を中心で行うとありましたので、国語でいうと「情報を的確に理解し効果的に表現する力」というように定義をすれば、それに基づいたアンケートの実施や分析ができると思います。一般的な言語能力の理解が違ふと何を調査し何を提案したらよいのかが曖昧になっていかないかということが心配なので、分科会の立上げの時に共通理解ができるとよいと思います。

(渡辺会長)

豊橋准看学校で授業をしたりするわけですが、できない子に共通するのが「本や教科書を読まない」ということです。読んでも読解力が不足しているため内容が理解できないという場面もあります。つまり、できない子の特徴として読解力が不足しているという現状があると思います。

(内浦教育委員)

新しい分科会の委員になられる方はとても大変かと思いますが、前回の時に教育長が言われたとおり、言語能力の育成はとても重要だと思います。言語能力の育成は、学校現場だけに任せるのではなく、家庭や地域でも行うべきものだと思いますので、家庭や地域も巻き込んだ施策があるとよいと感じました。今の新入社員の一部は、仕事を休むことをLINEやメッセージで上司に伝えて電話をしないという現実もあります。こういったことについては、言語能力が育てばできるようになるのかという疑問もあります。言語能力だけの問題なのか、生活習慣も含めた言語能力の育成が必要なのか、今後様々なツールが発展してくるのでそれも含めた検討があるとよいと思いました。

(豊橋西高等学校 西牟田校長)

言語能力はとても大切だと以前から思っています。特に、問題行動を起こす高校生と話をしますと、状況がうまく説明できず興奮してしまうということが何回もありました。教師が言葉を補ってあげることで、落ち着いて説明することができるようになります。「うざい」「むかつく」「やばい」という言葉を卒業しようということを常に生徒たちに言っているわけですが、少しでも微妙な変化を言葉によって分けられることが非常に大事だと思っています。

(豊橋商業高等学校 白井校長)

言語能力というのは範囲が広くて難しいと思っています。読書量については、高等学校の図書館利用の現状は著しく落ちています。本校では、昨年1年間で借りた冊数が4,500冊ですが、それでもこの地域の高等学校の中では断トツで多く借りられている状況です。図書館担当の先生たちがどうしたら増やせるかということで、いろいろなことを仕掛けているわけですが、実際には予算面などから難しいということです。また、文科省との施策で、図書館に4社ぐらいの新聞を置こうということが言われていますが、予算的に高等学校が4社の新聞を買うことができない現状もあります。高等学校の図書館は生徒が非常に行きにくい場所にあり、建物の最上階や上級生の教室前を通らなくては行けない場所にあることが多いです。言語能力を伸ばすことと読書量が関係しているかはわかりませんが、やはり読んで書くことが本校の生徒の場合、必要だと感じています。そのためには、図書館を有効に活用させるための工夫と読むことの大切さを保護者の方にも知っていただく必要があると思っています。それは、学校が生徒に無理に本を借りさせようとしているという話が本校のPTAからでまして、生徒のために行ったことがそのように捉えられているということがあったからです。本校としては、図書館を使って本を読ませることで言語能力を向上させていく一助となればと思っています。

(駒木教育監)

国語が苦手で理系へ進学するということがあります。大学入試も変わってきており、数学の問題などは、問題文章が長くて読み切れないため、内容が理解できず問題が解けないということがあります。理系こそ、文章を読み込めないといけないという現状があり、言語能力の育成は重要だと思います。そのため、国語の先生だけでなく、理系の先生にも分科会に入っていただいて全体で考えていくことも必要だと思います。

(渡辺会長)

言語能力の育成については、みなさん肯定的でやっていく必要があるということですが、山西教育長いかがでしょうか。

(山西教育長)

やる方向で検討していただいてありがとうございました。しかし、レジユメにも小中高等学校の各発達段階に応じてと書いてありますが、特別支援がどのように関わってくるのかということの一つの視点として入れておいてほしいと思います。小学校は小学校で特別支援との関わりがあって、中学校は中学校で関わって、高等学校は高等学校で関わるという横のつながりは当然あるため、各発達段階で言語能力がどうかではなく、特別支援の子どもも含めた全体的でどうなのかということを考えてほしいです。豊橋市の小中高特連携教育推進協議会には大きく2つのねらいがあり、一つは、教育活動の連携をすること、もう一つは、系統化を図っていくということのため、どの発達段階の子どもも、どこに在籍している子どもも豊橋の大事な子どもたちという考えで進めてほしいです。また、子どもたちを理科的な側面で見たらこうなっていくのではないかと、英語の側面だったらこうではないかと、佐藤校長から特別支援も視野に入れたという提案をしていただいたわけですが、今度は、言語能力か

ら見たらどうなのかという側面で、子どもたちの発達を見ていけるとよいと思います。非常によい討論をしていただきありがとうございます。言語能力分科会を立ち上げる方向で進めていただければと思います。

(松山小学校 水野校長)

言語能力の定義について、どういう段階があるのかということもはっきりさせて進めてほしいと思います。実体験をさせながら、物事を読み解く力を育て、文章として書けるようにしていくことが大切だと思います。言語能力分科会の委員として、国語以外に、総合的な学習の教員も入れていることから、実体験も重視しながら言語能力の育成を図っていくことを期待しています。

(豊橋特別支援学校 白濱校長)

言語能力ということで、今の時代だからこそとても必要なことだと思います。しかし、範囲が広すぎるとこの分科会でどのように研究を重ねていくのか難しくなると思います。体験も重要ですし、国語だけでなく総合的な学習や理科、社会となると、やることがたくさんになり、ポイントが絞れないと思います。国語と総合的な学習を軸にとありますので、この2つの教科でできることを模索していくのもこの研究の在り方の一つかと感じました。この言語能力分科会は大変意義のあることだと思います。

(豊橋聾学校 加藤教頭)

本校はコミュニケーション能力を育てていくのが目標の一つです。3歳未満の子どもから18歳まで校内に在りて、生まれてすぐのハンディキャップをもった子どもたちにどのように言葉を入れていくかということで、様々な委員の方が言われたことを行っています。聞こえないですし、音があるかないかわからない小さな子どもが、周りの大人がモデルになりながら、音があるとか驚いてみせるとかおいしい物を食べたときにうれしそうな顔をするようなことを行っています。聞こえないけれども感情を伝えることで、その時の子どもの反応を認めていくことから始めています。そうすることで、音があることがだんだんわかってきて、そこから日常の言葉が入っていきます。幼稚園になると友達と関わりながら、覚えた言葉を使って文字も少しずつ覚えていきます。小学生・中学生・高校生になると日常のコミュニケーションとは違う学習言語の読解が問題となります。そのため、この分科会に参加させていただいて教育にも役立てていけたらと思います。

(豊橋高等学校 丸崎校長)

高等学校は2022年に学習指導要領が新しくなります。それに向けて各教科の内容について、教員研修が入ってきます。当然、言語活動も重視されています。私自身も、様々な研修に参加し、R80という言葉を知りました。R80とは、活動を行い、振り返りを80文字以内の文章で書かせるという活動で、今後導入されるかと思っています。今までは、このようなことはやってこなかったのですがこれからはやっていく必要があると言われていています。高等学校の学習内容・学習方法は大きく変わりますので、この分科会で研究しながら各学校に還元できれば非常によいのではないかと思います。

(大崎小学校 兼子校長)

言語能力に課題があって、今後豊橋の子どもたちの言語能力を伸ばしていくということで、この分科会が立ち上がることはとても大事なことだと思います。立ち上げの根拠資料となる全国学力・学習状況調査を見て、私なりに思ったことは、調査に対して無回答の子どもがいて、無回答の子ども現状を考えると、幼少期からの言語環境が十分ではなく、どうやって回答していいかわからなかったり、読み解くことが途中で面倒になったりして書けないという子どもも多くいると思います。本校の問題行動がある子どもたちをみても、十分なコミュニケーション能力が育っていない現状があります。読んだり書いたりする前に、聞いたり話したりすることについても、十分に言葉を操ることで良好な人間関係に繋がる現状もありますので、発達段階に合わせて言語能力の育成を図っていかなくてはいけないと思います。読書量につきましても、今の子どもたちの実態は、読む子はとても読んでいると思いますが、読まない子はどのように読まないかという、ゲームやメディアに流れている子もいれば、習い事に時間を使っている子どももあり、多様な毎日の過ごし方をしています。そのため、読書量を増やすことに夢中になってしまうと、少し違うかと思います。読書経験を増やすことは大事だと思います。こういったことも踏まえて今後検討されていくとよいと思います。小学校で、ボランティアの方が図書館に来ていただいて、月に数回読み聞かせなどの場面をつくってもらっています。子どもたちにとっては、豊かな言葉に触れ合う時間をつくるということは、とても有効ですし、それがすぐに学力の向上には直結しませんが、読書は心の読書と心の読書と二面性があると思います。これからの世の中で、自分の思っていることをメッセージとして発信したり、様々な情報を読み解いたりすることに繋がる読書もあると思いますが、言葉の中の豊かな感性を育てていく読書もありますので、そのようなことも整理していただきながら、豊橋の子どもたちの言語能力の育成ができたらしらと思いました。

(渡辺会長)

みなさんのご意見をいただいて、この分科会を立ち上げていくことになりましたがよろしいでしょうか。予算が必要になった時には古池教育部長にお願いしたいと思いますので古池教育部長、一言お願いします。

(古池教育部長)

活動の課題などを整理していただいてありがとうございます。予算の面でご要望があればがんばりたいと思います。また、先程、高等学校の先生より予算の話がありましたが、高等学校の予算は難しいですが、市の図書館としては、高等学校の図書館、大学の図書館ともしっかり連携をしていくことを今後提案していく方向でいます。そのため、市の図書館から高等学校等の図書館へ訪問する機会も増えていくかと思いますので、その機会を通して、市の図書館を活用できるアイデアをいただければ、市の図書館としても協力できることはしていきたいと思いますのでよろしくお願いします。

(渡辺会長)

新分科会については、提案のように進めていきたいと思いますのでよろしくお願いします。次に、「2 その他(1) 東三河小中高特連携教育の推進」について、東三河教育事務所の加藤英雄主査から、ご説明をいただきます。

(東三河教育事務所 加藤主査)

東三河教育事務所における連携教育事業について話をさせていただきます。東三河教育事務所では、東三河小中高特連携教育推進協議会のもと、大きく4つの取り組みを進めています。1つ目が、「キャリアフレッシュセミナー」です。東三河8市町村の中学1年生に、東三河の高等学校の学科紹介と高校生との語り合いを通して、将来の夢や進路を考える機会にしてもらうため、今年度は8月25日(土)に愛知大学豊橋キャンパスにて、中学1年生や保護者など約600名と、豊橋工業高等学校・豊橋商業高等学校をはじめ、普通科・専門学科12校10学科の参加のもと開催しました。豊橋市からは、179名の子どもたちに参加いただくとともに、教育委員会・中学校・高等学校の多くの先生方に協力いただきました。ありがとうございました。会の様子としましては、それぞれの学科を生かした展示や体験など、具体的でわかりやすく中学1年生に伝えるとともに、中学生と高校生との語らいの場で小グループになり、中学1年生の部活動や勉強、進路についての疑問や悩みなど、高校生がそれぞれの経験を交えてアドバイスする様子が見られました。参加者の声として、中学生からは、「目標を持っている先輩たちはとても輝いて見えた」「自分の目標を見つけてがんばりたい」、高校生からは、「中学生と話すことで、自分の高校生活を見直すことができた」、保護者からは、「学科の様子は自分も知らなかったの、知ることができてよかった」と、参加した中学生・高校生・保護者にとって有意義な会になったと考えています。2つ目は、「人事交流連絡会」です。学校種間の壁を超えた連携のために、小中高特で行っている教員交流の経験者が各校種の管理職に報告したり、情報交換したりする取り組みです。この異校種人事交流が交流経験者自身の資質向上だけでなく、異校種経験で得られたことをもとに、元の現場に戻った時の活動に繋げようとする報告がありました。3つ目が、「実業高等学校における初任者研修」です。豊橋市が豊橋工業高等学校で取り組んでいることを参考に、豊川市・蒲郡市・田原市・新城市・北設の初任者を対象に、地域の人材育成を担っている専門学科高等学校を知り、教員の視野を広げ、キャリア教育に対する指導力を高めようということで、今年度は三谷水産高等学校と新城高等学校で実施しました。参加した教員のほとんどが普通科高等学校の出身のため、興味・関心も高く、参加教員からは「子どもたちに働くことへの関心や意欲を持たせ、学習意欲を向上させることが基本だと思う」「自分のクラスの子どもたちに勉強することのおもしろさや魅力を伝えていきたい」といった声をいただいています。これらの3つの取り組みに加え、キャリア学習の応援企画として、今年度より「東三河輝く人・活躍する人紹介プロジェクト」を立ち上げました。これは、東三河8市町村の学校に通う子どもたちに、東三河にゆかりのある講師との出会いを通して、東三河の地に根差した自らの力で未来を切り開いていく力を育成していくことを目的として、学校や市町村教育委員会の要請に応じて、市町村の枠を超えて、キャリア学習の講師を派遣するというものです。現在、3名の方に登録いただいております。今年度は2回活用いただきました。登録講師につきましては、今後も市町村教育委員会に協力いただきながら充実させていきたいと考えています。

(渡辺会長)

最後に、オブザーバーとしてご参加をいただきました豊川市教育委員会、田原市教育委員会、蒲郡市教育委員会、新城市教育委員会の先生方からご意見を頂戴したいと思います。

(豊川市教育委員会 仲田指導係長)

豊川市はキャリア教育の視点で、小中高特の連携交流を図っています。具体的には、代田中学校区で物づくりの視点で豊川工業高等学校と、御津中学校区では外国語活動の視点で御津高等学校と連携を図っています。また、豊川特別支援学校と中部中学校・平尾小学校との交流も継続しています。児童生徒にとってよい経験ができており、今年度は2月28日に東三河小中高特連携教育推進協議会で事例報告をさせていただきました。不登校児童生徒がなかなか減少していませんが、例えば中1ギャップを解消するために、中学校の入学説明会等で、小学生が中学校の授業を体験するなど様々な工夫が豊川市ではされています。今年度は、国立教育政策研究所の「魅力ある学校づくり調査研究事業」として、豊川南部中学校区の小中学校で取り組みを進めています。具体的には、「不登校の新たな一人を出さない」という取り組みです。目立つ子、気になる子に目が向きがちですが、そういう子に目を向け対応していくことは初期対応となります。もちろんそれも大切ですが、その他大勢の子に目を向け、学校生活を充実させることで、不登校の未然防止を目指すというものです。新規の不登校を出さないためには、目立つ子、気になる子ではなく、全員に対して目を向けていくということです。具体的には、どの学校でも行っている「居場所づくり」「絆づくり」に焦点を当てた取り組みになります。小中学校の間でも情報交換を行いながら取り組みを進めています。来年度は、この取り組みを豊川市内全体に広げていく予定です。小中学校の連携を深めながら対応していくということです。昨年度末の会に参加させていただいたときに、東陽中学校の池崎校長より「この10年で連携については十分進んだので、系統化にシフトし、子どもの生きる力を育むという本来の目的に繋げていく」という話があり、感激したのを印象的に覚えています。小中高特でどのような学びをしていくのか、何を大切にしていくのか、共通理解を図り、更に本日のような言語能力という新たな視点を打ち出して取り組みを深めていくというような豊橋市のすばらしさを豊川市にも紹介していこうと思います。

(田原市教育委員会 峠課長補佐)

田原市では、福江中学校と伊良湖岬中学校が福江高等学校と連携型中高一貫教育に取り組んでおり、今年度より連携型一貫の入試がスタートしました。また、福江中学校が来年度からコミュニティスクールとして新しくスタートすることと、伊良湖岬中学校と福江中学校の統合もありまして、ますます幼保小中高特の連携の必要性を、特に地域の方が感じているという現状があります。教員だけでなく、地域の方も巻き込んで連携を強化できたらということで、福江中学校区で取り組んでいます。他の校区については、来年度以降に福江中学校区の成果を見ながら、自分たちの校区で取り入れられることを取り入れていくということで進めています。今日の話の中でもあった英語教育ですが、田原市では特に小学校の英語教育について、移行期対応プログラムについて予算をつけて取り組んでいます。幼保小学校でのプログラム開発に力を入れていますが、その子どもたちが中学校でどう学んでいくかという接続の部分が少し欠けているという課題があります。本日の資料の中にもアンケートがありましたが、経年で見たとときに中学校入学後に落ちるのではないかという課題があり、今日報告があった異校種で授業を見合うということなどが大変参考になりました。特別支援教育については、田原市では、小中学校における「個別の教育支援計画」の引き継ぎは行われていますが、幼保から小学校、中学校から高等学校への接続が十分できておらず課題となっています。そのことについて、障害福祉課が中心になって、「リレーファイル」というものを、幼保



小中高特と引き継いで使えるものを新たに作っていくための会議を行っています。来年度から始める予定です。本日いただいたリーフレットも大変参考になりますので、広く保護者にも知らせてうまく活用できるものにしたいと感じました。また、田原市の学校教育振興計画においては、「ふるさと学習」に力を入れています。福江高等学校でもキャリア教育の一環として「ふるさと学習」に取り組んでいますが、幼保小中高と系統的にキャリア発達していくので、基礎的汎用的能力を系統的に育てていくことが一つの課題となっています。更に、読解力や論理力の不足ということも課題になっています。この言語能力分科会の資料も参考にしながら田原市でも取り組んでいけたらと思いました。

(蒲郡市教育委員会 山本課長補佐)

特別支援教育分科会の「個別の教育支援計画」について、蒲郡市でも今年度かなり議論してきました。本日のリーフレットなども参考にさせていただきながら、蒲郡市でも生かしていきたいと思います。

(新城市教育委員会 神谷指導主事)

豊橋市の小中高特連携の推進が、それぞれの分科会の組織の力によって確かな成果を得ていることが伝わってきました。新城市でも参考にさせていただきたいと思います。また、言語能力に関する大変魅力的な話をお聞きすることもできました。新城市の教育長がよく言っている言葉に、「三多活動」というものがあります。「多く読む」「多く書く」「多く話す」ことです。小学校の学年に応じて「三多活動」をしっかりと推進して、学年に応じた力を系統的につけていく。小学校や中学校のすべての教科において「三多活動」を実践するように言われています。改めて言語活動の大切さを感じさせていただくことができました。新城市では、来年度より新城有教館高等学校が新設されます。新城有教館高等学校は、総合学科ですが、文理系と専門系の2つの系列が併設されています。本日新聞発表もありましたが、定員を上回る第1希望がありました。新しい学校に期待をされていることの現れだと思っています。確かな教育が実践されなければならないということですが、その中に小中高の連携も一つの魅力として発信できたらよいと考えています。文理系の英語教育に関する連携、専門系については理科学等の連携がされるとよいと考えています。地域に根付いた確かな教育を小中高ともに連携して行っていくことを模索しています。来年度は、新城東高等学校・新城高等学校・新城有教館高等学校の3校になりますが、33年度から新城市唯一の公立高等学校が新城有教館高等学校になりますので、大事にしながらもよい教育実践を進めていきたいと思えます。

(渡辺会長)

他に何かありますでしょうか。

(豊橋東高等学校 藤原校長)

今まで長い期間この会に出させていただいて大変勉強になりました。特に子どもたちが高等学校に入学するまでの系統性や一貫性を保つ上で、大変有意義な会であると思います。また、教員の異校種間での交流、地域を含めて子どもたちを育てていくこと、今回の言語能力分科会の設置についても大変タイミングがよいと思います。しかし、一方で教員の働き方改

革も考えていく必要がある時期でもあります。この会の委員になった先生方は、学校を離れてプラスアルファの研究・仕事をしなくてはならない状況でもありますし、学校の中で見るとそのしわ寄せがどこかで生まれている状況もあります。そのため、分科会を3年スパンや5年スパンで一度見直すことも必要だと思います。英語教育・理科学教育については、当初から設置しており、ずっと続いています。いつまでやるのかということが正直見えません。我々は、仕事を生み出すのは上手ですが、仕事を削るのは苦手なため、このままでいくと分科会がどんどん増えていく可能性もあります。子どもたちを育てることは第一のことですが、いつまでやるのか、いつ見直すのか、いつ差し替えをしていくのかということを考えていただけるとありがたいと思います。

(渡辺会長)

ありがとうございました。

以上をもちまして、「第23回豊橋市小中高特連携教育推進協議会」を終了します。